

中国四川省成都市紀行

— 中国の西部は着実に発展している —

環日本海経済交流センター長 藤野文昭

一年振りに四川省の省都成都市を訪れた。中国が都市と農村の格差の是正を狙って進めている西部大開発の中核都市である。着実なペースで都市開発が進んでいるとの印象である。西部とは12の省・市を指すが、その広大な地域の経済力の1/4以上を狙っているのが四川省であり、農業、畜産資源を中心に水力、地下資源（ガス、石炭、非鉄など）、観光資源、薬材などの資源にも恵まれているし、著名な长虹電子、その他機械工業もあり豊かな省である。

日本からはいろいろな企業が進出している。流通産業の雄としてイトーヨーカ堂があり、トヨタ自動車、コベルコ、味の素などの大企業が工場を作っている。

イトーヨーカ堂の第二号店を視察した。1997年の第一号店に続き2003年9月に第二号店を開いた。営業成績は大変順調だという。日本を含めイトーヨーカ堂の全店舗の内売上げが上位5指に入るといふ。大変驚いたのは購売意欲が非常に高いということである。特に衣料品の購売力は高く商品価格も日本とさほど変わらない。成都の人はファッションに大変敏感だそう。消費者の購売意欲はどんどん上って居り将来成都のみならず四川省の他の都市、例えば樂山（大佛で有名）など、或いは四川省から分離独立して直轄市となった重慶市などからも出店の要請が来ているそう。西部としては陝西省西安市なども対象となるかも知れない。

西部は東部沿海の上海などから見れば遅れて居り、吾々日本人から見ると遥かに遠い内陸ではあるが、現実には着実に発展しているという印象である。内需が拡大しつつあり、同時に中国全体として中間層が育ちつつあるのだろう。トヨタ自動

車が生産しているマイクロバス（コースター）も順調に生産して居りすでに部品の内製率は70%に達して居り発展のスピードは非常に早いと云う。

日本人は上海には5万人いるが、成都にはまだ300人にすぎないという。ある商社の成都所長の言によれば、日本人の内陸を見る目はかなり遅れているのではないかという。江沢民時代に中国が西部大開発をぶちあげた時日本ではあまり関心がなかった。日本の投資も東部沿海地帯に集中して、内陸西部にはあまり目を向けて来なかった。中国は貿易と併行内需拡大を、東部と西部の格差是正の度西部に大きなテコ入れをしているのである。高速道路の建設は急速ですでに延べ3万キロに達しているし、鉄道の建設も進んでいる。長江の水運も開かれやがて5千屯から1万屯級の船が重慶に上って来るだろう。

西部開発の目玉として2000年に始まった西気東輸プロジェクト（西の新疆ウイグル自治区・タリム盆地のガス田から東の上海まで約4,100キロをパイプラインで結び、沿線及び大消費地上海に天然ガスを供給するプロジェクトで総工費1,400億人民元以上）は2002年7月4日に正式着工、2004年12月末には正式営業が始まっている。ものすごいスピードである。

天然ガスの年間供給量は36億立方メートルを上回り、現在の中国の天然ガス年度消費量の10%を占める。

このように西部と東部との距離は短縮しつつある。

このように西部は四川省を中核としていよいよ本格的な発展の時代に入りつつあることを日本は気がつかねばならないと感じた。

以上